文献紹介

青木栄一　著
『交通地理学の方法と展開』
古今書院　2008年12月　230頁　3500円＋税

本書は，交通地理学研究の第一人者である著者が，50年におよぶ研究体験をもとにこれまでの日本の交通地理学を振り返り，批判し，将来あるべき姿を提言したものである。これまで著者が各誌，編著書等において発表してきた交通地理学研究の方法論や史料論，および関連する実態論を，著者自身の体験に基づく研究史を中心に再構成して提示したものである。ただし，本書における交通地理学の研究対象は，著者がもっとも多くの研究を積み重ねてきた鉄道交通が中心である。

本書の章構成は次の通りである。

Ⅰ．交通地理学とはどのような学問か
Ⅱ．新しい交通地理学への模索
Ⅲ．計量的手法による交通地理学への批判
Ⅳ．交通地理学の方法と資料
Ⅴ．鉄道地図の思想とその展開
Ⅵ．メソスケール鉄道史についての考察
Ⅶ．鉄道研究と鉄道趣味
Ⅷ．世界的な視野で交通を考える
Ⅸ．交通地理学の将来を考える

Ⅰ章では，まず交通地理学の二つの立場，交通現象そのものを解明する立場と，交通現象を地域形成のインパクトとする立場の明確な違いを改めて述べている。このことを最初に指摘したのは有末武夫であるが，有末が次第に第二の立場に傾斜していくのに対し，著者は一貫して第一の立場で研究を行ってきた。次に交通地理学の系譜として第二次世界大戦以前の日本の交通地理学ではいくつかの視点で様々な研究が行われたが，交通地理学の体系化に向かって動き出すのは1950年代であり，特に山口平四郎・清水馨八郎・有末・柾幸雄の４名によるところが大きいという。

Ⅱ章では，著者自身が影響を受けた人々との出会いを軸に，著者の研究環境の形成過程と鉄道史研究の系譜を示した上で，鉄道交通を歴史地理学の立場で研究することの意義とその鉄道史研究への影響を述べている。鉄道交通の歴史地理学的分析は，地域社会から鉄道の発達を考える方法の確立につながる。そしてミクロな地域事例研究を重ねることにより帰納的に鉄道の発達と地域社会の関係を明らかにすることができる。

Ⅲ章では，アメリカから導入された計量的手法が地理学界には大きな影響をもたらしたのだが，それを採用した多くの「交通地理学」研究についての明確な批判を展開している。これらの計量的手法による交通地理学研究は，実際の交通機関のもつ多くの側面を捨象し地域間結合の抽象化を目的とするものであった。交通発達の多くの地域的要因などには関心を持たず，現実の複雑な交通現象の解明には全く役に立たないもので，結局計量的手法を主用する交通地理学は衰退したとする。

Ⅳ章では，まず交通地理学の方法論として景観論と形態論に触れ，技術発達史の教養を深めることの意義を強調した。その上で，鉄道史研究における基本資料である『鉄道省文書』と様々な鉄道統計を紹介し，それらの資料について考察を加えている。本書の中で最も多くの分量を成しており，初学者にもわかりやすい丁寧な記述となっている。まず『鉄道省文書』についてはその管理と保存に著者自身も関わっており，その経緯を具体的に述べている。さらに大分県の日出生鉄道等を事例として，その内容を詳細に紹介し考察を加えている。次に鉄道統計について，明治時代から現在までの系譜をたどり，時代による統計の内容やまとめ方について考察し，具体的に輸送量統計の見方と図表化，地図化の方法を紹介している。

Ⅴ章は，従来まとまった論考のない鉄道地図について，その目的と特性，原初形態，位相図化，グラフィック・デザイン化，縮尺・方位などを述べ，さらには線路配線図と線路縦断面図，観光案内図としての鉄道地図にも触れている。特に鉄道地図の位相図化については，鉄道網の発達に伴い鉄道地図や全国時刻表の付図としての鉄道地図が刊行されるが，それらに盛り込まれる情報をどう限定するかは様々であり，次第に縮尺・方位が正確ではない，路線を直線的に描く地図となった。

この傾向はさらに鉄道地図のグラフィック・デザイン化を進め，地下鉄路線図などでは一般的となった。

Ⅵ章では，1960年代以降盛んに研究されたミクロスケール鉄道史に対し，メソスケール鉄道史の意義，研究の系譜，調査手順を示し，メソスケール鉄道史の重要性を提唱している。個々の小地域や個々の鉄道企業を対象とするミクロスケール鉄道史は，個々の鉄道の性格や役割を評価し，これを地域社会の一要素とするが，全国的視野での位置づけは難しい。これに対し著者は，府県レベル程度を対象として地方的要素を取り入れて，鉄道網の発達をより明確にするメソスケール鉄道史の有効性を提起した。それは全国鉄道網形成の横断的把握ともいえる。さらにメソスケール鉄道史の具体的な調査手順を３段階に整理して提示している。第１段階では鉄道統計年報類を用いて鉄道の免許・開業・廃止の年月日をリストアップする。第２段階では鉄道網の形成に大きな影響を与えた要因，その地域内の都市や産業の発達状況の考察をする。第３段階は，第1，第２段階を総合して鉄道網の形成過程を時代区分することである。

Ⅶ章は，鉄道研究をとらえる上では無視できない鉄道趣味について正面から記述したかつてない論考といえる。現代の鉄道趣味はきわめて多様化しているが，その歴史的過程を顧みると鉄道雑誌の重要性が指摘できる。鉄道雑誌に掲載される記事・論文には学術的評価の高いものも多い。また鉄道趣味の主力は鉄道車両にあることから，趣味の著作によって私鉄車両変遷史や鉄道車両通史が編み出された。さらに鉄道関連分野の情報集積量（データベース）という点では鉄道趣味の世界が学界をはるかに凌駕している現状が指摘できる。

Ⅷ章も，世界的視野の導入の指摘だけでなく具体的な方法を示している点で画期的な論考といえよう。現代の鉄道研究はいわば「一国鉄道研究」であって世界史的教養がなくても研究者として自立できる低いレベルにあるとし，メソスケール鉄道史研究の考え方を拡大して，世界史的な視点で鉄道を解明することが交通地理学の重要な課題となると指摘し，具体的事例研究として，世界的な視野で各国の国有鉄道の成立と発展を考察した。第一次大戦までに成立した国有鉄道を３つに類型化した上で，第一次大戦後と第二次大戦後に成立した国有鉄道を比較し，最後に現代各国の国鉄改革について検討している。

Ⅸ章は本書のまとめである。交通研究は基本的に学際的であるから，他の分野の出身者と共通する基礎的専門教養をもつ必要があること，鉄道交通の実態に迫ろうとしなかった従来の地理学への反省と鉄道趣味の世界に蓄積された研究成果に関心をもつこと，総合的な交通の歴史への関心が大切であることを述べている。また，特に交通地理学の初学者には自分の関心をもつ交通機関の歴史を多面的，総合的に学習することを勧めるとする。

さて本書は，「あとがき」に記されているように著者の自伝的な交通地理学論であり，本書の記述の大部分が著者自身の体験に基づいているため非常に説得力があり，本書の具体的記述内容に引き込まれて読み進む，学術専門書であり入門書としての性格も合わせ持つといえる。前半部のⅠ～Ⅲ章は著者が再三学界で主張してきたことであり，鉄道研究を中心とするとはいえ交通地理学の研究系譜を分かりやすく提示している。後半のⅣ～Ⅷ章は鉄道地理学の研究方法と多様な展開について詳細に記している。Ⅴ・Ⅶ・Ⅷ章では体系的な論考のなかった鉄道地図の考察，学界を凌駕する趣味の世界の研究蓄積，世界的視野での研究の重要性をそれぞれ具体的事例を示しての主張に注目すべき点がある。Ⅳ章は鉄道地理学の史料論であり，Ⅵ章では鉄道地理学の方法論として著者が特に重視しているメソスケール鉄道史の提唱である。

ところで，本書の刊行当初に評者が「交通地理学の方法と展開」というタイトルからのみ推察したのは，本書が交通地理学のテキストに思えたということである。つまりこれから交通地理学を学び研究しようとする初学者を主な読者に想定したものと思えたということである。評者は交通地理学の研究教育をする立場にあるので，木村辰夫『基礎からの交通地理』（古今書院，1991年）の刊行以来交通地理学のテキストの発刊を待望していた。本書の刊行直後にはゼミ学生などに本書の購入を勧めた。しかし実際には，鉄道交通を対象にしなければ，それほど参考にならない面も多い。著者は「はしがき」で「鉄道交通を中心とするが他の交通機関にも共通するところは多い」と述べ

ている。また，著者をはじめとする交通地理学や交通史学の研究者の間では，異なる交通機関の相互関係やそれらの総合的な交通体系を明らかにすることが重要な課題として共通認識されている。しかし，交通地理学研究が交通モードごとに行われてきたのも事実であり，それは各交通機関には独自の特性があって共通しない点も多いということによる。本書が「交通地理学の方法と展開」と題しているのに，鉄道交通地理学について述べているのは，近代交通機関の主役が鉄道であって関心をもつ人々も多いことを考えると，不適当とまではいえないが，鉄道以外の交通地理学研究を志す初学者にとっては参考にならない部分も多いので，「鉄道交通を中心に」という副題は必要であったと思われる。

最後になるが，評者は計量的手法を主用する交通流動研究や著者の言う第二の立場の交通地理学を「交通地理学」とする教育を大学で受けてきたため，自己の研究を「交通の歴史地理学」と称することはあっても「交通地理学」と称することには抵抗があった。著者と出会い，交通機関を対象として交通現象の実態把握をする研究，地域社会の中での交通の役割を把握する研究こそが「交通地理学」であるという理解をすることができたといえる。

（岡島　建）